



子どもたちとワークショップをする中で感じたことから、探究的な場づくりのコツやファシリテーションのヒントを探ります。

第42回

脳科学を活かしてかかわってみる

きれるって
もしろいかも!?

どんな方法で
学んでいる?

子どもたちの学び方は十人十色。

とはいっても、そんな多様な学び方に寄り添おうとするとき、何を軸にかかわり方を選ぶとよいか迷うことはありますか?

以前、幼児さんたちとボタンを分類するアクティビティをしていた時のこと。普段は見ないような多種多様なボタンに子どもたちはもう夢中。色や形、穴の数などの特徴ごとにボタンを分けてみよう」とスタッフが促すのですが、分けたそばから自分のお気に入りのボタンを手元にかき集めて分類を崩してしまいます。

そんな中、一人の女の子が「プラカップの中にボタンをいくつか入れてジャガジャガ振り始めました。どうやら音を楽しんでいるようです。そこで、「ボタンの数を増やしたら音は変わるかな?」と聞いてみました。彼女は「握りのボタンを追加して振り、また違うボタンを入れて振りと、遊び始めました。やはり音が楽しいようです。」



使っている知能に
合わせる

それなら音で分類できるようにしてみようと、僕は「プラカップ」を3つ並べ、「キラキラ(金属)」のボタンをここに投げ入れて「ごらん」と促してみました。ボタンがカップの底に当たるとコンツと音がします。そこにボタンが溜まつてくると、カシャッと音が変わります。女の子は目をキラキラさせてボタンを投げ入れていきます。「次のカップにはどのボタンを入れる? 音が違うかもよ?」と聞

何を軸にかかわり方を選ぶか迷ったとき、子どもたちの「脳」を見てみると、探究のストーリーがつながりやすくなるのでおすすめですよ!

※ハーバード大学の心理学者ハーバード・ガードナーが提唱した理論で、「人間の知能は単一ではなく、言語・論理・音楽・身体など8種類の知能がある」とする考え方。

鴨川 光
(かもがわ ひかる)

1987年茨城県生まれ。
ELMSセンター主席研究员。早稲田大学大学院教育学研究科修了後、2013年6月より現職。子どもの思考力や社会性の発達について研究している。ワークショップやボランティアを通して子どもたちと一緒に成長中。

